様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００７９

研究課題名（和文）中国宗教における聖地巡礼の動態性と近代性―華南西江流域の歴史民族誌を通して

研究課題名（英文）Dynamism and Modernity in the pilgrimage to sacred places in Chinese religion: The historical ethnography of Western Guangdong

研究代表者
志賀　市子（SHIGA, Ichiko）

茨城キリスト教大学・文学部・教授

研究者番号：２０２９５６２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国華南地域、とくに広東省西部の河川流域の聖地―村の祭祀の中心である廟、族人が集う祠堂、商人が行きかう会館、神々が降臨する宗教結社といった場所―を対象として、聖地を巡る商人、宗教者、巡礼者、農民、水上居民といった「移動する人々」の信仰や実践を描き出したものである。流域を往来するこうしたさまざまなアクターのコミュニティと地域を越えたネットワークが近代以降新たな聖地を創出し、新しい祭祀や経典、新しい社会活動を生み出してきたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、第一に文化人類学、中国近代史、中国巡礼史を専門とする学際的グループによる現地調査と文献調査を通して、これまでほとんど注目されてこなかった広東省西部の河川流域の聖地をめぐる歴史民族誌を描き出した点にある。第二はそれらの聖地に関わるアクターとして、宗教者や巡礼者だけでなく、商人や女性信者、水上居民など、流域を往来する多様な人々に焦点をあて、その営みや相互作用を俯瞰的かつ連関的にとらえながら、聖地の創出を明らかにした点である。第三に先行研究の乏しい当該地域において、これまで見過ごされてきた現地資料を掘り起こし、近代華南社会史の一端を明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the beliefs and practices of various actors, including merchants, religious people, pilgrims, peasants, and water-dwelling people who traveled to sacred sites in South China, especially along the river of western Guangdong Province. The sacred places to which this study was targeted includes religious temples and shrines in the villages, ancestral halls where the same lineage members gathered, native place associations where merchants stayed, and spirit writing altars where the gods descended. The result of the study revealed that the communities and trans-regional networks of these various actors have created new sacred sites, new rituals and scriptures, and new social activities since the end of the 19th century.

研究分野：文化人類学

キーワード：粤西　鑑江流域　経堂　扶鸞　宗族　関帝信仰　聖地　水上居民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年日本や欧米の宗教研究の諸分野では、世界遺産となった聖地や巡礼ツーリズムへの関心が高まっている。だがそれに比べて、中国宗教研究における聖地巡礼への関心は、まだそれほど高いとは言えない。関連する研究は近年増加傾向にはあるが、研究対象とされる地域や時代には偏りがあり、未開拓の領域が多く残されているのが現状である。

本研究計画では、近代中国における聖地の動態的な創出過程に目を向ける。従来の中国聖地巡礼研究でとりあげられてきたのは、そのほとんどが俗界から離れた既存の聖地へ宗教者や進香団が赴くという固定化した朝山進香の事例だった。だが、近代カトリシズムにおいて街中の教会や貧しい村の子供たちの前に聖母が自ら出現し、その場所がやがて聖地として創出されていったように、中国宗教においても、神々が人間の住む俗界に自ら降りてお告げを下したり、姿を見せたりする「下凡顕聖」という現象がしばしば見られる。とくに清末の華南地域では、末劫意識の高まりとともに、「扶鸞」と呼ばれるシャーマニスティックな降神術が大流行し、市井の廟や会館（外来の商人の拠点）に神々が顕聖して災劫からの救済を説き、神のお告げが経典として刊刻・普及することによって、聖地の活性化や新たな聖地の出現といった現象が起きていた。

中国広東省の西江とその支流は、華南地域と雲南、四川を含む西南地域、またベトナムとを結ぶ大動脈であり、近代以降河川交通の発達により人、物、情報の往来が飛躍的に拡大し、繁栄する商業活動が宗教活動の活性化をもたらした。本研究が対象とする西江流域は、中国における聖地とはどういう場所か、なぜ近代になって聖地は活性化したのかという問題を考える上で、まさに恰好のフィールドと言えよう。

２．研究の目的

本研究計画は、従来の中国聖地巡礼研究において十分研究されてこなかった聖地の動態性と近代性を解明することを目的としている。具体的には、①近代以降の中国において、宗教的聖地はどのような人々によっていかに創出され、いかなる宗教的、社会的機能を果たしてきたのか、②宗教的聖地は近代以降どのように変容し、現代に至っているのか、という２つの問いを掲げる。研究対象地域は中国広東省西部の西江とその支流域とし、この地域に点在する宗教的聖地の歴史と現状を事例としてとりあげる。

３．研究の方法

①研究対象とする道教神や女性神の聖地を実際に訪れ、関係者への聞き取り調査、祭祀活動や儀礼の調査を行い、碑刻資料や収蔵文献の撮影、記録を行う。またそれらの聖地へ定期的に進香している広東や香港の香会（進香組織）を対象として同様の調査を行う。②流域の聖地のマッピングを行い、これに寺廟や道観などの宗教施設の分布、廟の信仰圏、廟会や香会の分布、商人ネットワーク（会館の分布）、女性や水上居民の巡礼ネットワークなどの情報を加え、地域の宗教伝統の全体像を把握する。③国内外の図書館や檔案館で地方志や雑誌、新聞など関連文献を探索し、複写・撮影を行う。

４．研究成果

研究開始当初の研究課題や計画がそれぞれどの程度達成できたのかを、まずは年度ごとに行った研究活動を通してみていきたい。

平成 30 年度（2018）は、中国広東省粤西地域においてメンバー全員の参加による共同調査を

実施した。期間は 8 月 9 日から 17 日にかけて、主な調査地は呉川市、高州市、信宜市、肇慶市である。この共同調査では廟や祠堂の歴史と現状についての観察や聞き取りを行うとともに、それらの施設が所蔵している民間の経典や族譜の写真撮影を行なった。代表者以外の 3 名は当該地域での調査は初めてであったが、高州市博物館館長の陳冬青氏を始めとする現地の研究協力者とのつながりができ、その後の個人調査につながった。この調査では、研究方法で挙げた①と②について、ある程度達成することができた。またこのとき鑑江流域を主な調査地としたことにより、共通の研究対象地域を西江とその支流全体に広げるのではなく、支流の鑑江流域に絞っていく流れにつながった。各自の役割分担もより明確になり、志賀は経堂を始めとする宗教結社、稲澤は水上居民の集落と廟の活動、宮内は祠堂と宗族の活動、石野は当該地域で最も盛んな女性神である冼夫人信仰を主として研究することになった。

当該年度には、個人ベースで西江流域の聖地巡礼の資料収集も行った。志賀と稲澤は西江流域悦城の龍母廟の巡礼に注目し、毎年龍母廟への参詣を行っている香港の坪洲悦龍聖苑の進香活動に参加して龍母の「沐浴更衣」の儀礼を見学した。また鑑江流域の民間宗教活動の概要を把握するために、志賀は 2019 年 2 月に呉川市黄坡鎮の年中行事の一つ「年例」を調査、稲澤は 3 月に高州の水上居民の年例を見学した。文献研究については、歴史学の宮内と石野が中心となり、広州の図書館や档案館で関連する資料の収集を開始した。

3 月末に行った研究会では、当該地域における研究史の整理、整理中の調査資料に関する情報共有、今後の研究に向けての意見交換を行った。また最終年度のワークショップをどのような形で行うかの具体的な計画についても話し合った。

令和元年度（2019）は、前年度の調査を継続して行うことになったが、メンバー全員の予定を合わせて共同調査を行うことはむずかしいことがわかったため、個人ベースでそれぞれ現地調査と資料調査を行うことになった。

志賀は前年度に引き続き鑑江流域の呉川市・高州市・信宜市に分布する経堂（扶鸞、宣講、誦経などの宗教活動を行う民間の善堂）に関し、高州市博物館の協力と香港中文大学の大学院生の協力を得て現地調査を進めた。稲澤は元水上居民の居住地の媽祖誕の調査を行うとともに、高州市博物館、高州市図書館などで関連する資料を収集した。

宮内と石野は、前年度に続いて文献資料の収集を中心に研究を進めた。宮内は近代信宜・高州両県に関わる新聞・雑誌の記事目録や新編地方志である『信宜県志』や『高州県志』から、近代両県の地域エリートの活動に関する記事の抽出・整理を行った。石野は中央研究院近代史研究所・歴史語言研究所において主に明清時代の地方志を閲覧し、とくに冼夫人に関わる項目を抽出し、分析を進めた。

ところが当該年度末からコロナ禍による渡航制限が始まり、２月から３月に予定していた現地調査や資料調査ができないという状況が生じた。３月に東京で予定していた全体の研究集会も中止せざるを得なかった。

本来最終年度であった令和２年度（2020）は、メンバー全員が個別に粤西地域での現地調査と国内外の図書館等を利用した補充調査を行い、またワークショップを開催してその成果を発表する計画であった。だがコロナ禍によって海外渡航は不可能となり、国内外から研究者を招聘することもできなくなった。そのため全体の計画を変更せざるを得なくなった。

７月に行ったオンライン研究会では、前年度までの研究の進捗状況を報告し、当面手持ちの資料を使って研究を進めていくことを確認した。また独立した形でのワークショップではな

く、科研メンバーが所属している華南学会の分科会（学会では「企画報告」という名称）で、全体の趣旨説明とそれに即した個別報告を行い、本研究の成果とすること、研究期間を1年延長することで合意を得た。学会報告の準備として秋にはオンラインによる打ち合わせを二度ほど行った。

12月12日、華南学会研究大会（オンライン開催）において、企画報告「近代中国の地方社会と信俗文化－粤西地域を事例として」を行った。このときの口頭発表は、翌年の華南学会の学会誌『華南研究』第７号の論文掲載につながった。

しかしながら、令和３年度（2021）になってもコロナ禍は収束せず、海外渡航ができない状況が続いた。とくに中国での現地調査はしばらく困難になることが予想されたため、未使用の研究費は主に文献資料にあてることとし、粤西鑑江流域の新編地方志や地方資料のデータベースを購入した。そして、最終報告書の代わりとして、『華南研究』第7号（2021年11月発行）に「近代中国の宗教文化と地方社会―粤西地域を事例として」という特集を組み、趣旨説明及び科研メンバー全員の個別論文を掲載することにした。各論文の執筆にあたってはオンラインでの研究会を何度か開催し、投稿後も査読を重ねた。

この特集では、まず志賀が企画の趣旨説明で、粤西鑑江流域をとりあげる意味や近代中国における聖地創出というテーマについて論じた。個別の論文では、石野が「粤西の冼夫人信仰―明清時代を中心に」というタイトルで、これまでに収集してきた冼夫人に関する石刻資料を分析し、主に明清時代における冼夫人信仰の実態を明らかにした。志賀は「粤西地域の経堂―19世紀末扶鸞救劫運動の伝播と地方化」というタイトルで、19世紀末に西南地域で興った扶鸞救劫運動が当該地域に伝播し、地方化する過程において、人や経典（物、情報）の往来がいかに経堂（扶鸞結社）という聖地を生み出していったのかを明らかにした。宮内は「清末民初期・信宜県の宗族の結合と革命」というタイトルで、清末民初期信宜県における有力宗族を事例とし、族人の結集とネットワークが中国革命の原動力の一つになっていたことを明らかにした。また稲澤は「高州の水上居民の陸上がりと民俗の変遷」というタイトルで、高州の水上居民の近現代史と信仰、習俗の変遷に焦点をあて、鑑江地域の水運と水上居民の盛衰、またその文化的変容の一端を明らかにした。

以上述べてきたとおり、本研究課題は本来現地調査と海外の図書館、研究機関での資料調査を中心に進めていく予定であったが、コロナ禍により後半２年間は調査ができず、新しい資料を収集することができなかった。

しかしながら、完成形には至らなかったとはいえ、本研究課題ではいくつか特筆すべき成果を挙げることができた。ここでは以下の三つを指摘しておきたい。

第一に、広東省西部の鑑江流域という、これまで歴史学や人類学の分野でほとんど注目されてこなかった地域に焦点をあて、学際的なメンバーにより集中的に資料を集め、華南地域の近代社会史や宗教史研究に一つの足掛かりを築いたことである。民族誌的資料のみならず、現地の経堂が所有する手書きの民間経典から祠堂が保管している族誌に至るまで、現地に行かなければ収集することのできない貴重な資料を発掘し、収集することができた。また当該地域の各県、市で出版されている新編地方志や地方志のデータベースを購入して活用することも積極的に行った。

第二は、いわゆる「聖地巡礼」という言葉から想起される、民間信仰の神々が祀られた寺廟への定期的な参詣を対象にするだけでなく、祠堂や会館といった一般に宗教施設とはみなされない施設をも対象に含め、その活動やネットワークに注目したことである。近代中国の地方社会に

おいて、社会活動、経済活動、宗教活動、教育活動は重層している。地域の宗族組織の中心である祠堂や商人の拠点である会館にも神々は祀られ、扶鸞などの降神活動が行われることもある。こうした複合的な機能を持つ聖地（祠堂、会館、廟）を巡る人々の動き（流れ）はしばしば重なり合い、相互に作用を及ぼし合う。人々の流れから新しく生まれた大きなうねりは渦となってさらに多くの人々を巻き込み、新しい聖地を生み出していく。中国の地方社会では、こうした動態性は絶えず見られる現象であったが、19 世紀末から 20 世紀にかけての近代中国においては、こうした動きは、地域や国家を超えた大きなうねりとなり、地方社会を大きく変容させていったのである

第三に、科研メンバーそれぞれが、本研究の成果を海外の学会や刊行物において積極的に発表してきた点である。志賀は2018年から2019年にかけて、台湾、香港、ドイツの国際学会で本研究の成果を中国語と英語で発表した。石野は2019年6月に中国福建省で行われた洞天福地与保護国際学術研討会において、本研究の成果を含め、広東省の聖地巡礼に関する発表を中国語で行った。これらの発表のほとんどは論文化され、すでに刊行されたもの、またこれから刊行される予定のものもある。

科研の期間中にワークショップを開催することができなかったことは大変残念だったが、各メンバーは、本研究課題の成果を基に研究を継続しており、近い将来再び集まって、国際的な学会を開催することを計画している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 志賀市子	４．巻 7
２．論文標題 粤西地域の経堂ー19世紀末扶鸞救劫運動の伝播と地方化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 華南研究	６．最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 志賀市子	４．巻 55
２．論文標題 粤西鑑江地域の経堂ー信仰と儀礼を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城キリスト教大学紀要	６．最初と最後の頁 179ー200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石野一晴	４．巻 7
２．論文標題 粤西のセン夫人信仰：明清時代を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 華南研究	６．最初と最後の頁 5－23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲澤努	４．巻 7
２．論文標題 高州の水上居民の陸上がりと民俗の変遷	５．発行年 2021年
３．雑誌名 華南研究	６．最初と最後の頁 61－72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮内肇	4．巻 7
2．論文標題 清末民初期・信宜県の宗族結合と革命	5．発行年 2021年
3．雑誌名 華南研究	6．最初と最後の頁 45ー60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 志賀市子	4．巻 なし
2．論文標題 清末民初粤地區的鸞堂ー兼談十九世紀末鼠疫流行與救劫経的拡散	5．発行年 2020年
3．雑誌名 范純武主編『扶鸞文化與民衆宗教国際学術研討会論文集』	6．最初と最後の頁 393‐430
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 志賀市子	4．巻 6
2．論文標題 書評　稲澤努著『消え去る差異、生み出される差異――中国水上居民のエスニシティ』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 華南研究	6．最初と最後の頁 57－64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮内肇	4．巻 3482号
2．論文標題 書評近代中国の基層社会を生きた人々のしたたかさ――蒲豊彦著『闘う村落』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮内肇	4．巻 第75期第３号
2．論文標題 書評　上田信著、岩波書店（岩波新書）『人口の中国史――先史時代から一九世紀まで』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中国研究月報	6．最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 志賀市子	4．巻 第14輯
2．論文標題 盂蘭盆会的主角：以現代香港的盂蘭盆会為中心	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『祭日研究』	6．最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 宮内肇	4．巻 64
2．論文標題 『国民政府建国大綱』実現への模索――1930年代の広東省における地方自治論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『孫文研究』	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 宮内肇	4．巻 667
2．論文標題 近代中国における自治と宗族――一九二〇年代・三〇年代の広東省台山県の事例研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『立命館文学』	6．最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 志賀市子	4．巻 131
2．論文標題 書評・野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東方宗教	6．最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石野一晴	4．巻 8
2．論文標題 清末の「巡礼ガイドブック」『参学知津』から見た僧侶の巡礼	5．発行年 2018年
3．雑誌名 洞天福地研究	6．最初と最後の頁 80-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石野一晴・池平紀子	4．巻 131
2．論文標題 第二回日仏中国宗教研究者会議参加報告記	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東方宗教	6．最初と最後の頁 102-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　7件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 志賀市子
2．発表標題 粤西地域の経堂と民間経典
3．学会等名 2020年度日本華南学会研究大会(オンライン)
4．発表年 2020年

１．発表者名 宮内肇
２．発表標題 同族と革命への信仰？――清末民初期・信宜県の有力宗族の行動から
３．学会等名 2020年度日本華南学会研究大会(オンライン)
４．発表年 2020年

１．発表者名 石野一晴
２．発表標題 石刻史料から見たセン夫人信仰
３．学会等名 2020年度日本華南学会研究大会(オンライン)
４．発表年 2020年

１．発表者名 稲澤努
２．発表標題 高州の水上居民の陸上がりと信俗の変遷
３．学会等名 2020年度日本華南学会研究大会(オンライン)
４．発表年 2020年

１．発表者名 SHIGA Ichiko
２．発表標題 Spirit writing Halls in Western Guangdong: Their Positioning in the 19th-Century Spirit writing Movement
３．学会等名 International Conference, “Spirit writing in Chinese History” International Consortium for Research in the Humanities (IKGF)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石野一晴
２．発表標題 明清時代羅浮山的隆盛与巡礼
３．学会等名 洞天福地与保護国際学術研討会（中国福建省寧徳市）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 志賀市子
２．発表標題 清末民初粤西地区的鸞堂―兼談十九世紀末鼠疫流行與救劫経的拡散
３．学会等名 蘭陽博物館・佛光大学歴史系共催「扶鸞文化與民衆宗教国際学術研討会」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 志賀市子
２．発表標題 19世紀末中国広東地域における救劫経典の伝播とその世界観 ―近代中国の「救世宗教」運動に関する最近の研究動向と併せて
３．学会等名 「宗教と社会」学会第26回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 志賀市子
２．発表標題 十九世紀末扶鸞救劫運動與広東地方道教―以粤西考察中心
３．学会等名 香港中文大学道教文化研究中心主催「中大論道：道教研究系列論壇（50）」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石野一晴
２．発表標題 盛世之下的泰山與朝山進香（清朝最盛期における泰山と巡礼）
３．学会等名 明清史夏合宿の会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石野一晴
２．発表標題 明清江南士大夫の宗教生活―屠隆の修養を中心に―
３．学会等名 日本道教学会第69回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石野一晴
２．発表標題 明清時代における羅浮山の隆盛と巡礼
３．学会等名 シンポジウム「洞天思想の展開とベトナム・日本」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲澤 努
２．発表標題 広東二元社区論の再検討―広東省汕尾の事例から
３．学会等名 東北大学東北アジア研究センター共同研究「移動と流行―移民が持ち込んだもの／持ち込んだもの」共同研究「現代中国における内国移動とエスニシティ」2018年度第3回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 稲澤 努
２．発表標題 汕尾における「客家」と「福老」
３．学会等名 国立民族学博物館主催：国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 游子安、志賀市子	４．発行年 2021年
２．出版社 三聯書店（香港）出版	５．総ページ数 521
３．書名 道妙鸞通：扶ケイ與香港社会　上、下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	宮内　肇 (Miyauchi Hajime) (10722762)	立命館大学・文学部・准教授 (34315)	
研究分担者	稲澤　努 (Inazawa Tsutomu) (30632228)	尚絅学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	石野　一晴 (Ishino Kazuharu) (90804047)	清泉女子大学・文学部・准教授 (32632)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関